

「盗まれたリボン」を読む

—『告白』の一挿話「マリオンのリボン」を巡っての「死」の解釈—

熊本 哲也

A Reading of "The Purloined Ribbon":

A Textual Analysis of the Death for the Episode "Ribbon of Marion" in Rousseau's *Confessions*

Tetsuya KUMAMOTO

"The Purloined Ribbon" at the end of the Livre second of Jean-Jacques Rousseau's *Confessions* is known for the possibilities of various readings. The two most outstanding readings are: psychoanalytic literary analysis and deconstruction literary analysis. The former does not differentiate the "narrator" from the "narrated" in the text. The latter denies finally the analysis of the unconscious level and neglects the importance of the first half of the text while it is bound for the speech-act theory. In short, the precedent analysis tends to rely on theories and lacks the careful textual analysis.

In order to construct a more inclusive literary critique, this paper focuses upon the desire theme of "The Death of Mme Vercellis" for it allows us to see the complicated interactions in the text. The textual analysis reveals that the words *place* (position) and *perte* (loss for the death) in the first half of the text are used effectively to show the analogical relationship between Mme Vercellis and her servant Marion to whom Jean-Jacques makes a false accusation of the stolen ribbon. By doing so, the narrator extends the meaning of *place* and *perte* to signify the symbolic death of Marion and sees Marion identifying with Mme Vercellis. In other words, Marion has the necessity to *suppléer* (fulfill) the loss of Mrs. Vercellis and has a role as a substitution to mourn the deaths of both Mme Vercellis and Marion.

Therefore, the exceeding desire of the narrator shows the connection between the text of "death" in the first half and the text of Stolen Ribbon Incident in the latter half of the Episode. The ribbon Jean-Jacques purloined literally ties the two texts by representing his "desire" and "mourning" for Mme Vercellis and Marion. In this sense, the purloined ribbon is just like a Freud's "bobbin" in *The Beyond of the Pleasure Principle*.

「マリオンのリボン」の挿話

『告白』¹の第二巻は、ジャン＝ジャックがその故郷であるジュネーヴを出奔し、それまでのいわば家庭的な世界から、茫漠たる世間の中に身を移して、自分の地位＝位置 (*place*) を認識せざるを得なくさせるような状況で生活をし、また幾人かの女性達と邂逅し、

広い意味での性的な覚醒に関する体験を積んでゆく、そのようなエピソードによって構成されている。ジャン＝ジャックは16歳という多感な年齢に達している。この16歳という年齢は、ルソー自身の『エミール』²によれば、既に人生の四分の一にあたる少年時代を経ており、「第二の誕生」を開始する時期である。すなわち、それ以前は「存在するため」の誕生であったが、

ここでは「生きるため」の誕生であり、また、「種」に対する「性」の誕生の時期なのである³。子供に肉体的、精神的に性差が生じるに伴って、ルソー言うところの「危険」の迫っていることが予言される⁴。われわれがこの小論において分析の対象としたいのは、そうしたジャン＝ジャックの「危険」の刻印された体験のひとつである「マリオンのリボン」⁵と称される有名なエピソードである。

この挿話は『告白』第二巻の締めくくりに置かれ、生まれてからジュネーヴで過ごした日々を語った第一巻とは明白に一線を画している。というのも、ジュネーヴ時代のある日、その城門から出て散策するうちに夜になり、戻ってみるとジュネーヴの城門が閉ざされていることを発見したジャン＝ジャックは、この町を出奔する決意をした、ということが第一巻の末尾にあり、故郷ジュネーヴ、そして自分の少年期との決別が語られているからである。16歳のジャン＝ジャックは、当時のサルデーニャ王国、現在のフランス東南部からイタリアにまたがる地域が第二巻の舞台であり、そこでジャン＝ジャックは数年間におよぶ放浪生活を送ることになる。この放浪期間、ジャン＝ジャックはおもに貴族の家の下僕として雇われ糊口をしのいでいた。そうした家のひとつにトリノの町に住んでいた未亡人のヴェルセリス伯爵夫人の家がある。この家で滞るは、雇い主であるヴェルセリス夫人の死という理由で、三ヶ月ほどしか続かなかったのであるが、ルソーの記憶に悔恨とともに鮮明に刻印されている出来事が起きている。それが、ヴェルセリス家に同じように雇われていたマリオンという名の料理女に対して、彼自身の盗みの罪のぬれぎぬを着せてしまうという出来事である。

さて、このエピソードを有名にし、様々な解釈を試みさせている理由は、このようにしてルソーが「告白」する出来事の内容のみならず、彼が出来事の後に一生の間、悔恨にさいなまれた体験を語り、また執拗に自らの罪ある行いについての弁明を行っていることにある。その罪を犯した出来事とは次のようものである。

一つの家庭が分解するのだから、家の中か多少は混乱し、多くのものが無くなるのは仕方がない。しかしながら、召使たちが忠実で、ロレンチ夫妻が用心していたために、財産目録から足りないものはなにもなかった。ただ、ポンタル嬢だけか、バラ色と銀色の、もう古くなった小さなリボンを紛失した (La seule Mlle Pontal perdit

un petit ruban couleur de rose et argent déjà vieux)。ほかにもっと良い多くのものが、私の手の届くところにあったが、このリボンだけが私の気を誘い、わたしはそれを盗んだ。ろくに隠しておかなかったので、たちまち見つかってしまった。どこでとったのかと人々から尋ねられ、私はまごつき、口ごもり、そしてとうとう顔を赤らめて、マリオンがくれたのだと言った。マリオンというのは、モーリエヌ生れの娘でヴェルセリス夫人が食事にお客を招くのをやめて、ご馳走よりも栄養の多いスープの方が必要になり、料理女に暇を出したときに、その代わりに料理をやらせていたのであった。彼女はきれいなだけでなく、山岳地方にしかみられないいきいきとした血色をしており、とりわけひかえめで穏やかな様子は、彼女を見たら愛さすにはいられないほどであった。そのうえ、善良で品行がよく、忠実なことは信用できる。だから、私かその名をあげたとき、一同は驚いた。私も彼女に劣らず信用されていたので、二人のうちどちらがごまかしたかを、確かめる必要があると判断された。彼女が呼ばれた。集まった人は大勢で、ラ・ロック伯爵もそこにいた。彼女がやって来ると、リボンが出される。私は厚かましくも、彼女に罪を着せる。彼女は狼狽したまま、ものも言わず、私を見つめるが、その視線には悪魔でも降参しただろう。ところか私の野蛮な心はそれに逆らう。ついに彼女は確信をもって、しかし興奮はせずに、身に覚えがないと言い、私の方に向き直って、どうか自分の心に立ち帰り、あなたには何も悪いことをしたためしかない純情な娘の名誉をけがさないで欲しいと言う。ところが私は、すさまじい厚かましきで、自分の言明に間違いはないと言い、あなたカリボンをくれたのではないかと、面と向かって主張する。かわいそうに娘は泣き出して、私にはただこれだけ言った。「ああルソーさん。あなたはまじめな人だと思っていました。あなたのため、私は本当に不幸になります。でも私は、あなたと入れ代わりたくはありません。」それだけだった (La pauvre fille se mit à pleurer, et ne me dit que ces mots : Ah Rousseau ! je vous croyais un bon caractère. Vous me rendez bien malheureuse, mais je ne voudrais pas être à votre place Voilà tout.)。

彼女は簡単ではあるか、しかし、しっかりと弁解が続けたが、私に対しては、ほんの少しものしるような言葉をはかなかつた。この控えめな態度は、私の断固たる調子に比べて、彼女に不利になった。一方にはこんな悪魔的大胆さと、他方にはこんな天使のような穏やかさを想定することは、不自然に思われた。はっきりとは決めかねたようだったか、推測は私に有利だった。当時のごたごたのなかでは、暇をかけてつっこまなかった。そしてラ・ロック伯爵は、二人とも暇を出して、罪ある者の良心が、無実の者のために、十分にあたを討ってくれる

だろう、というのとどめた。彼の予言は無駄ではなかった。一日たりとも、それが実現しない日はなかったからである。(pp.84-85.)

このように、ジャン＝ジャックが下働きをしていた家の中で、他人のリボンを盗んだことを咎められ、その罪を同年代の料理女であるマリオンという少女にさせてしまう。人々の前で二人の言い分が聴取されるが、ジャン＝ジャックは最後まで嘘をつき通し、結局、犯人は確定せず被疑者であるふたりはともに解雇される、という内容である。

多様な解釈者が注目している、この出来事を語った後の弁明の部分において、語り手ルソーは、大いなる悔恨にさいなまれたことを述べながらも、「わたしのマリオンへの好意が（彼女に罪を着せた）原因であった」⁶として、以下のように自己分析的な言葉を用い、自分の過ちを弁護しているのである。

私はいました告白を率直に行った。そして自分の悪事の卑劣さをここで飾ったとは、たしかにだれも思いはしないだろう。しかし、同時に、私が自分の内心の感情を示さなければ、また真実に一致するかぎりにおいて、弁解を恐れるようでは、この本の目的を果たしたことはないだろう。あの残酷な瞬間ほど、私が悪意から遠かったことはなかった。そして、あの不幸な娘に罪を着せたとき、奇妙なことだが、彼女に対する好意が原因だったのは本当である (*lorsque je chargeai cette malheureuse fille, il est bizarre mais il est vrai que mon amitié pour elle en fut la cause*)。彼女のことが頭の中にあったので、最初に思いついた相手に罪を着せたのだ (*Elle était présente à ma pensée, je m'excusai sur le premier objet qui s'offrit*)。自分がしたかったことを、彼女がしたのだと言って、つまり私が彼女にリボンをあけるつもりだったのだから、彼女がそれをしてくれたのだと言って、罪を負わせたのだった。ついで彼女が姿を現したのを見たとき、私の心はひどく痛んだ。だが、大勢の人が居合わせたことのほうか、私の後悔よりも力を持った。罰はほとんど恐れていなかったが、恥だけが恐ろしかった。しかも死よりも、罪よりも、この世の何よりも、恥を恐れていたのだ。地の底にもぐり込んで、息を殺していたいと思うほどだった。どうにもならない羞恥心がすべてに打ち勝ち、羞恥だけから厚かましくなった。そして私の罪が重くなればなるだけ、それを認められる恐ろしさから、私は大胆になった。自分がこの場で泥棒、嘘つき、中傷者として認められ、公に宣告されるという恐怖だけしか眼につらなかつた。すっかり心が乱れたために、他のいっさいの感情がなくなってしまった。もしも、気持ちを落ち

着かせてくれたならば、間違いなく私は、なにもかもはっきりと話しただろう。ラ・ロック氏が私を引き離して、「あのかわいそうな娘を破滅させてはいけない。もしも、君に罪があるのなら、私に白状しなさい」と言ってくれたならば、私はすぐに彼の足もとにひれ伏しただろう。それはまったく確かだ。けれども、私に勇気を与えてくれなければならないときに、私がおじけづくようなことしか、人々はしなかった。年齢のこともまた、注意を払ってしかるべきである。やっと少年時代を脱したところ、というよりはむしろまだ少年時代だった。若い時の卑劣な行為は、大人になってよりも罪が重い。しかし、気の弱さだけのことならば、それほど罪は重くない。そして私の過ちは、実を言えば、それにほかならなかったのだ。だから、その思い出で苦しむのも、悪そのもののためではなく、悪が引き起したに違いない不幸のためである。この悪は私に善をもたらささえもした。つまり、私がかつて犯したただ一つの罪について、恐ろしい印象が残ったので、その後の生涯のあいだ、およそ罪への傾きがあるいっさいの行為から、身を守ることができたのだ。私が嘘を嫌うのも、大部分は、これほど陰險な嘘をつきえたことについての、後悔から来ているのだと思う。もしもそれは、私があえて信ずるように、つぐないうる罪であるならば、私の生涯の最後が多く不幸のうちひしがれていることによって、また困難な場合にあって、四十年間の廉直と名誉によって、つぐなわれるべきである。そしてかわいそうなマリオンの仇を討ってくれる人が、この世にはたくさんいるのだから、彼女に対する私の侮蔑がいかに大きなものであったにせよ、その罪を負い続けるという心配はあまりしていない。このことに関して言うべきことはこれだけだ。もう二度とこの話はしなくてもいいことにしたいものである。(pp.86-87)

この挿話を巡る精神分析的解釈

20世紀におけるルソー研究の泰斗と目されるジャン・スタロバンスキーは、このエピソードに語られるルソーが抱いている悔恨、つまり、ある種の自己批判を、自らに課した「想像上の懲罰」(*la punition de l'imagination*)であると捉え、「これらのエピソードに先立って語られているサディックな状況への反作用 (*réaction*) の意味を持っている」⁷と述べている。サディックな状況とは、この「マリオンのリボン」の挿話に先だつて『告白』の第一巻に語られていた「ランベルシエ嬢の折檻」⁸のエピソードを指している。このエピソードはジャン＝ジャックの受けた折檻というサディックな行為が、むしろ、逆に彼に快感を与えたことを語っているのだが、「マリオンのリボン」では、

彼の犯した罪に対して必ずしも正当な罰が与えられず悔恨だけが残されたと述べられている。したがって、そうした罪へ当然与えられるべき懲罰（折檻）を自らの手によって加えるという「反作用」のエコノミーがこのエピソードを統御している、とスタロバンスキーは指摘しているのである。

「マリオンのリボン」事件へのスタロバンスキーの解釈は、以上のように『告白』の第一巻に語られているランベルシエ嬢から受けた折檻（fessé）についてのエピソードとの関連においてなされている。ところで、ランベルシエ嬢とは、両親を失った少年ジャン＝ジャックが伯父のガブリエル・ベルナルによってその息子とともに預けられた、ジュネーヴ近郊のボセーに居住していたランベルシエ牧師の妹である。テキスト外の歴史的な情報を述べてみると、1722年にジャン＝ジャックは10歳でこの家に託され、当時38歳のランベルシエ嬢と2年間そこで過ごすことになる⁹。問題のエピソードとは、ランベルシエ嬢がジャン＝ジャックに折檻（尻を打つ折檻）をした際に、ジャン＝ジャックがマゾヒスティックな快楽を覚え、彼のうちに性的なものへの目覚めが生じたことを記したものである（pp.15-16）。

しかし、この二つの挿話の直接的な結びつきについては、スタロバンスキー自身、それらを関連づけることにいささか躊躇している。すなわち、この二つの挿話は「いかなる顕在的な連続性によっても統一されない」、「罪についての叙述とエロティックな強迫観念についての物語の間に脈絡のない断絶があり」、「これら二つの部分の間の明らかな唯一の類似点は奇妙な（bizarre）という言葉が使われているだけ」¹⁰なのである。したがって、スタロバンスキーの見地は、この二つのエピソードを結びつけるために、テキスト上で「わたし」と称しているジャン＝ジャック及びルソーという存在に内在的であり、連続して一貫する「無意識」を常に前提としている。そうした見地から、スタロバンスキーは「マリオンへの愛情が原因である」と主張するルソーの態度を、いわゆる「愛の鞭」ともいえる懲罰を受けた体験から次のように解釈しようとする。「罰についての想像はある意味でマリオンに犯した過ちに対する『無意識的』反応ではないだろうか」¹¹と。つまり、ルソーがその罪の原因を愛情に帰するのは、無意識的にマリオンに懲罰を受けたからである、ということなのである。

スタロバンスキーの視座は、このようにテキストに、

飽くまでも、現れなかつたものとしての主体の無意識を兆候的に捉え説明することにある。これは、ジャン＝ジャックとルソーという語られる主体と語る主体を、一個の連続する主体ジャン＝ジャック／ルソーと見なし、その（無）意識を精神病理学に解釈することである。このことによってスタロバンスキーは、われわれにテキストを素通りした向こう側に、いわば「等身大」のジャン＝ジャック／ルソーの自我をかいま見させようとしている。つまり、この内在的解釈は『告白』という自伝の言語的、テキスト的構造を対象としては見ず、全てをジャン＝ジャック／ルソーの無意識に還元し、主にジャン＝ジャックの振舞いを分析することにある。

スタロバンスキーの解釈の後に、フィリップ・ルジュンヌは、「告白」の企てが「透明な」コミュニケーションへの回帰を目論んでいるという視点から、この二つのエピソードの目的がともに「愛情の告白」にあると見なし、スタロバンスキーに倣って二つを通底的なテキストとして扱っている。ルソーの「告白」の受取人は、同時代の或いは来るべき読者でもなく、「愛情を抱き、愛されたいと望んでいるという理由があって初めて、それに対して罪を犯した人物その人に対してであり、この人物はランベルシエ嬢やマリオンやママン（ヴァランス夫人）など誰でも良いのである」¹²とルジュンヌは述べている。ルジュンヌは、以上のような視点から「折檻」のエピソードのテキスト・クリティークを丹念に行い、ルソーの「告白」とは、現在において過去の罪を告白し贖罪をはかる行為、というよりはむしろ、過去においてなされなかった「愛情の告白」以外のものではないという結論を導きだしている。

さて、このルジュンヌの分析は、飽くまでも「ランベルシエ嬢の折檻」のエピソードについてなされたものであり、「マリオンのリボン」のエピソードそのものをテキスト・クリティークしたものではない。従って、ルジュンヌがそれまでの先行研究をまとめるにあたって、「これらの（研究批評の）作者達は5ページの（ランベルシエ嬢の折檻）のエピソードの）テキストを5行に要約できると思込み、凡において、ほとんどルソーのものが残っていないこの5行からしか推論を開始していない」¹³と批判していることを、そのまま、われわれの「マリオンのリボン」の読解への示唆として受けとめよう。われわれはここで、「マリオンのリボン」のテキストをその言語に則して忠実に

分析してゆきたい。というのも、このテキストも、「ランベルシエ嬢の折檻」のものと同様、プレイヤード版ルソー全集第一巻では4ページにも及ぶものであり、一つの出来事を巡って、当時のジャン＝ジャックと語り手であり解釈者でもあるルソーの存在が記された、いわば多層的なレベルで語られている複雑なテキストであると思われるからである。

脱構築的解釈

以上のような精神分析的な解釈の他に、もうひとつの別の視座から分析が行われていることも述べておかなければならない。それは、脱構築的な視座である。ポール・ド・マンは、『読むことのアレゴリー』¹⁴ という論文集の中で「告白（弁明）」*Les Confessions (Excuse)* と題した章をこのエピソードの解釈にあてている。ド・マンは、上記のスタロバンスキーやルジュヌヌの分析に共通している無意識或いは欲望と呼ばれる次元を脱構築しようとする。つまり、テキストが無意識や欲望の道具であるとみなすことを否定し、テキストを構成する言語の機能に分析の照準を合わせるのである。こうした目的から、ド・マンは言語の機能を論ずる言語行為論という解釈の装置を導入している¹⁵。ルソーの「告白」は、言語行為論における二分法という視点から見て、とりあえず「事実確認的言明」の一種ではあるが、そのように「真実」を確認し述べるのが、実際は免罪を得るための「弁明」を行う遂行的言明へと移調していることをド・マンは指摘しているのである。

そこで問題となるのは、この遂行的言明とされるルソーの弁明は、際限なくその理由を繰り返す、決定的な理由を述べることができないことである。つまり、ルソーは「わたしのマリオンへの好意が原因である」と盗みの原因が欲望にあったことを第一に弁解しながら、それを率直に認められなかったのは、「大勢の人前で恥をかきことを恐れたからだ」(p.86) と弁明する。更に、原因が欲望にあると言いつつ、マリオンに罪を着せたのは、殆ど、全くの偶然であるかのように「彼女のことを考えていたので、つい頭に浮かんだままに、その対象をつかって言いわけをしたのである」(p.86) と弁明してしまう。このようにして、語り手ルソーは、ある種の分析者のように無意識ないし欲望に行為の原因を還元しようとしながらも、次の瞬間異なる視点から弁明を繰り返している。そして、この「告白」の最後に「もう語らない」と述べたにもかかわらず、ルソー

は『孤独な散歩者の夢想』第四巻¹⁶ では、再びこれを「嘘」についての考察の内に引き合いに出してしまう。

かくして、弁明による遂行的言明は、常に失敗することを余儀なくされている。ド・マンは、こうした弁明の繰り返しについて、ラカンの『盗まれた手紙』への解釈、すなわち「シニフィアン連鎖」を暗示しつつ¹⁷、それ自体の意味内容に到達することを逸失して、テキストが連鎖的に反復されてゆくためであることを示唆している。ジャン＝ジャックが盗んでマリオンに与えようとしたリボンがまさにラカンの意味での「(純粋な) シニフィアン」であり、ジャン＝ジャックのマリオンへの欲望を記号化しているが、その意味内容そのものではなく、シニフィアンの連鎖的な戯れこそが意味をもつような「盗まれた手紙」ならぬ「盗まれたリボン」なのである。

しかし、ド・マンはこの論法をある決定的な地点で転回させ、ラカンの意味でのシニフィアンを生成する筈の無意識の領域をも排除しようとする。ジャン＝ジャックが盗みを問いただされた時、「マリオン」という言葉を発したことの弁明（「最初に思いついた相手に罪を着せた」*je m'excusai sur le premier objet qui s'offrit*）に注目し、「マリオン」という名前自体、反射的に口から漏れたに過ぎない意味のない言葉（「自由なシニフィアン」¹⁸）であり、上記の「リボン」のような連鎖のシステムに属している。ところが、この文自体が意味を切断する「破格構文」(anacoluthie)¹⁹ であるとド・マンは見なし、それが、無償の、すなわち、意味から逃れた「機械的な」システムに属しているとするのである。こうした「破格構文」がテキスト全体に散種され、テキストそのものが文字通り「機械として」機能しているとド・マンは捉える。「身体としてのテキストは、それが最終的には常にメタファーへと辿ることのできる比喩の代替についての含意に関わっているが、機械としてのテキストによって転移され、その過程において意味という幻想の喪失を被ることになる」²⁰ としてテキストの「機械性」を指摘し、無意識の介在を否定しようとする。「言語を心理的エネルギーに仕える道具とみなすどころか、今や次のような可能性が生じる。すなわち、諸々の動因、代理＝代替、抑圧、代行＝表象といった構築物全体が、いかなる形象化や意味にも先立つ、言語の絶対的なランダムネスの逸脱的で隠喩的な相関物であるという可能性である」²¹。

さて、ド・マンの分析の最大の根拠は、言語行為論的な二分法がルソーのテキストにおいて「告白」と「弁明」としてあり、それが移調してゆく、という点にある。つまり、ド・マンによれば、盗みが起こるコンテキストは事実確認的言明であり、それに対して「弁明」を意図した内容は行為遂行的言明へと転じてゆくというものである。しかし、この二分法によってテキストや言明を本来的に分類すること自体が不可能である、という言語行為論になされる批判を考慮しなければならない²²。というのも、端的に言えば、事実確認的言明そのものかなにかしらの遂行性を持っており、両者の分類自体が決定不可能となるのである。ド・マンはこうした二分法にあまりに忠実すぎて、ルソーの「告白」を「真実」を述べるモードでの告白と、「弁明」を行うモードでの告白とははっきりと二分してしまう²³。このことが、ド・マンに「事実」的な描写を提示するテキストへの等閑視的態度をもたらしている。ジャック・デリダは、「タイプライター・リボン」²⁴というド・マンの見地への批判的検討を行っている論文のなかで、ド・マンがヴェルセリス夫人の死という「事実」をリボン事件の「告白」と全く切り離していることを批判して、「ド・マンは、乳癌に続くヴェルセリス夫人の死の物語と、ルソーの癒されることもなく、和らげられもしない『悔恨の堪え難い重荷』とルソーが言っている罪の告白との間のパラグラフには関心を示していない」²⁵と述べている。われわれは、更に、デリダとともに、ド・マンが関心を持っていないのは、ルソーによって語られるヴェルセリス夫人が死ぬまでの全ての出来事である、と指摘しよう。われわれの対象となるのは、従って、ジャン＝ジャックがヴェルセリス夫人の家に入り、そこを出るまでのテキストとなるだろう。

以上のような複数の解釈を踏まえて、われわれはこのテキスト全体、すなわち、ジャン＝ジャックがヴェルセリス夫人の家に入り、そこから出て、更に告白を行うまでのテキストを、分析の対象とすることになるだろう。その際にわれわれが留意したいことは、①ヴェルセリス夫人の死を語る物語とルソーの罪の「告白」との関連性であり、②ルソー或いはジャン＝ジャック²⁶の欲望の所在、という問題である。

①このテキスト全体の構造は、1) ジャン＝ジャックがヴェルセリス夫人の家に従僕として雇われ、夫人の死とともに解雇される (pp.80-84)、2) ジャン＝

ジャックがリボンを盗み、その罪をマリオンに着せた「事実」を告白する (pp.84-86)、3) 前の「事実」についての弁明 (pp.86-87) となっている。1) の物語における主要なテーマはヴェルセリス夫人の癌による「死」という、癒しがたい病である。上記のデリダからの引用が示唆するように、夫人の死のこの「癒しがたき」はルソーに2) の「告白」を書かせる動機ともなっている「慰められる」ことの出来ない「悔恨の重荷」の性質へと転じて継承されているのではないか、という点にわれわれは注目したい。つまり、ヴェルセリス夫人の死の物語は、予め、その後続く消しがたい罪の意識の告白の内容を既に用意しているのではないか、ということである。

一見して1) の物語の内容は、単なる状況説明、事実の描写に過ぎないように思われるが、そこにおけるヴェルセリス夫人の死に至る顛末を語るテキストは、語り手であるルソーの介入によって微妙に解釈されている。つまり、ルソーの願望＝欲望によって常に統御されていると考えられる。というのも、われわれはルソーの記憶の中にあるジャン＝ジャックの心理なるものの正確さについて十分疑うことができるのである以上、ジャン＝ジャックの欲望ないし無意識は、直接的にではなく、語り手ルソーを通してしか示されない、ということを経験すべきだからである。そこで②の点が問題となる。

スタロバンスキーがその解釈の前提として、またド・マンが脱構築しようとしていた無意識、欲望というレベルの問題をわれわれはどのように扱えばよいのだろうか。精神分析的手法が行っている無意識の捉え方は、ルソーとジャン＝ジャックの同一視を暗黙の前提として、ルソーの自己分析を文字通りに辿っている。例えば、ジャン＝ジャックの行為に対して「奇妙な」という表現が語り手であるルソーによって述べられるとき、語り手によって理解できない心理や行動がジャン＝ジャックの「無意識」に基づいたものであるからであると分析家は説明しようとする。しかし、「奇妙な」という言語はあくまでも語り手であるルソーが記していることを忘れてはならない。この言葉は、ルソーがジャン＝ジャックと一致しないこと、同一の（無）意識を共有しないこと、つまりは、ジャン＝ジャックの欲望を語る正当性を篡奪していることを図らずも明らかにしている²⁷。ここに見るべきものは、盗みの第一原因としてジャン＝ジャックの欲望があったことではなく、む

しろルソーの自己分析の或いは「露出狂」者の欲望であり、こうやってよければ「欲望があった」という事実確認を行う欲望なのである。ド・マンは、この点に関しては、こうした欲望の二重構造を的確に把握したうえで、「性的関係だけでなく、無意識の隠蔽／暴露の動きを含意するまでに拡張された欲望が、このシーン全ての原因として機能している」²⁸と述べている。

そのうえで、ルソーがジャン＝ジャックの「事実」、すなわち、「奇妙なことだが、私の好意が原因であったというのは本当である」というジャン＝ジャックの欲望の次元を「事実確認的言明」として語っていると考えるならば、われわれはそこに自己言及的なルソーの過剰な欲望を見いだすことができる。言語行為論について精神分析的に論じているジョジャーナ・フェルマンの言葉を借りて言えば、「意識の自己反射、あるいは主観性の言語的自己言及性は、もはやなんらかの自己同一性に送り返されるのではなく、対象言及的余剰に、行為遂行的過剰に送り返される」²⁹のである。ルソーは、「わたし」という語を用いることで、自己言及的な事実確認性の名の元に、語り手自らの欲望を語っているのではないだろうか。そして、このように語られた自己についての物語は「事実確認的」な言明どころではなく、極めて「行為遂行的」なテキストとして生成されているのではないだろうか。したがって、われわれの対象とするテキストに欲望を見いだせるとしても、それは飽くまでも語り手のルソーのそれであり、われわれはその次元で分析を行わなければならないであろう。

トリノ

以上のような考察を前提にして、まず、このヴェルセリス家という舞台にジャン＝ジャックが入る際のテキストからわれわれは分析を開始しよう。

私の災厄の数日後、まえに言ったように (comme je l'ai dit)、私に親切だった宿のおかみさんが、たぶん勤め口が一つ (une place) 見つかったようで、ある身分の高い婦人が私に会いたがっていると言った。これを聞いた私は、本気で素晴らしい冒険に入ったように思った。というのは、私はそうなるのが常だったのである。その勤め口は、想像していたほど華やかではなかった。(Celle-ci ne se trouva pas si brillante que je me l'étais figurée.) 私のことを話してくれた召使いといっしょに、その婦人の家に行った。彼女はいろいろと質問し、調べ、私が気に入ら

ないでもなかった。それですぐに雇われることになったが、奥様のお気に入りという資格ではなく、下僕 (en qualité de laquet) としてであった。私は彼女の使用人達と同じ色の服を着せられた。ただ一つ違うのは、他の連中は飾り紐 (l'aiguillette) をつけていたのに、私はそれをもらわなかった。お仕着せには袖章がぜんぜんなくて、そのため町人の服 (un habit bourgeois) とほとんど同じだった。あらゆる私の大望が、ついに行き着いた思いがけない結末がこれだった。

(p.80.下線は熊本による)

ヴェルセリス家に入る契機を語った上記のテキストにおいて、「わたし」という人称代名詞は語り手の位格と同時に青年ジャン＝ジャックとしての位格として現れている。「まえに言ったように」という言葉を述べている「わたし」(je)とは、『告白』を語り続けている語り手のルソーに他ならないが、その他の「わたし」は殆ど常にジャン＝ジャックを指示していることが分かる。こうしたテキストにおいて、「わたし」という語には、全く無造作に現在語っているルソーと16歳のジャン＝ジャックが同居しているかのように示されている。基本的に、『告白』の語りはこの両者を全く区別していない。ルソーは、語りの現在にいる自己の内に、常に自己の過去が存在しているという前提に立って物語を進めているのである。

ところで、このテキストに見いだせるフランス語の *place* という語は、ここでは「地位の低い職」という意味に用いられている。これは『告白』、殊にその第二巻や第三巻においては頻繁に現れてくる言葉である。というのも、放浪生活を送るジャン＝ジャックは、常に貴族の家から家へと何かしらの下働きの職を紹介され移動しているからであり、彼が置かれていた不安定な「地位」であり社会的に下層の「階級」という意味を示唆している³⁰。実際、ヴェルセリス家においてジャン＝ジャックに与えられた地位は、「下僕」としてのそれであり、また、彼に与えられたお仕着せは「飾り紐」がなければ、単なる「ブルジョワ(町人)の服」という社会的階層を示唆するものとして現れている。

この *place* という語に注目する理由について、論理展開を先取りして言えば、後にヴェルセリス家において起こるヴェルセリス夫人の取巻き達によるジャン＝ジャックへの「陰謀」が彼の「地位」についてのものであり、「しかも、私は彼らにとって不安な存在であった。私が自分の地位 (*ma place*) にふさわしくないことは、彼らには分かっていた」p.83) また、盗みの後の事情聴取の際にマリオンがジャン＝ジャックに向かって発する言葉が、彼の *place* を指摘するものとなっているからである。(「あなたは私を不幸にしま

すが、私はあなたの立場 (votre place) に立ちたくはありません。」 p.85)。このように、ヴェルセリス夫人の家への導入部分では、ジャン＝ジャックの地位＝立場＝階級 (place) が下位、下層に位置つけられるものであること、そしてジャン＝ジャックの「大望」 (mes grandes espérances) はこうした「地位」に対する欲望であり、この同じ place という語が、他者との代替 (être à la place) という、異なる意味で機能してゆくことが予想されるのである。こうした意味で、ヴェルセリス家で与えられたお仕着せの「ブルジョワの服」に欠けていた「飾り紐」とは、まさしく「地位」を象徴するものであり、ジャン＝ジャックの盗む「リボン」が、この欠落を埋めるなにものかの役割を果たしている、と読むようにわれわれを誘惑せずにはおかないものなのである。

ヴェルセリス夫人の欠如

ジャン＝ジャックの入った家の主人であるヴェルセリス夫人は、貴族であるが、その遺産を与えるべき子供がいない人物として紹介されている。つまり、ヴェルセリス夫人の後を継ぐべき子供の不在が強調され、その不在を埋め合わせる者の地位が夫人の死とともに話題の中心となるのである。ところで、遺産とは生きている者がその死後、自らの不在の時へ向けて残す何かである。つまり、なにかしらの生きた痕跡の継承を自己ではない、他者に託し、いわば自己を代行させることに他ならない。夫人の遺産を継承できるものとは、夫人の存在や意志＝遺志を代理し代行するものに他ならない。さて、ジャン＝ジャックは、夫人の「口述筆記」(引用文下線部①)を行う役目をここで果たしていると述べられている。遺産の継承という問題において、夫人の言葉を口述するという行為は、文字通り、代理＝代行である意味で、こうした遺産継承のエコノミーを象徴するものである。

私が入った家のヴェルセリス伯爵夫人は、未亡人で子供がいなかった。その夫はピエモンテ人であった。彼女のほうは、サウォアの人だと思った。ピエモンテの人があんなにうまくフランス語を話し、あれほど純粋なアクセントだとは考えられない。壮年で、顔立ちは非常に気高く、教養も高く、フランス文学が好きでよく知っていた。手紙をたくさん書いたが、いつもフランス語でだった。彼女の手紙はセヴィニエ夫人の手紙のような調子とほとんど同じ優雅さを持っていた。その何通かは取り違えたかもしれないほどだった。私の主な仕事は、彼女の口述で手紙を書くことだった①が、いやなことではなかった。夫人は乳癌のためひどく苦しみ、もう自分では書けなかったからである。

ヴェルセリス夫人は才知があるだけでなく、気高く強い魂を持っていた。私は彼女の最後の病気を見守り、彼女が苦しんで死ぬのを見たのだけれども、彼女は一瞬の弱きも示さず、少しも我慢しようとは努力せず、女らしさを失うことなく、そういう態度には哲学があるなどとは考えてもいなかった。当時はまた哲学という言葉は流行していなかったし、今日のような意味では知りようもなかったのである。こういう性格の強さは、ときに冷淡 (sécheresse) にさえなった。彼女はいつも、自分に対してと同じように、他人に対しても冷たく思われた。そして不幸な人々に善いことをするのも、本当に憐れみからというよりは、それ自体が善いことだからするのだった。彼女のそばで過ごした三ヶ月の間に、私も少しこの冷たさ (insensibilité) を味わった。いつも眼の前にいる、多少は望みのある青年に、愛情を持つのは当然であり、自分が死ぬと感じていれば、その後この青年が助けや支えを必要とするだろう、と考えるのは当然だった。②ところが、私は特別な注意にも値しないと見たのか、または彼女につきまとう連中のため、その連中のことしか考えなかったのか、私には何もしてくれなかった。③

それでも、私を知ろうといういささかの好奇心を示したのをよく覚えている。時には私を問いただし、私カワラン夫人にあてて書いた手紙を見せて、私の意見を言えば、彼女も喜んでくれた。しかし、自分の意見を決して見せないのだから、私の意見を知るためには、たしかに上手なやり方ではなかった。私の心は、相手の心の中に入ったと感じさえすれば、好んで溢れ出るのだった。そっけなく冷たく問いただして、私の返事には、いかなる同意も非難もあらわさないのは、いかようにも信頼のしようがなかった。私のおしゃべりが気に入ったのか、気に入らないのか、まったく見当がつかないとき④、私はいつもおどおどし、自分の考えを見せるよりは、損にならないことしか言うまいとするのだった。それ以来気がついたことだが、人を知ろうとしてそっけなく問いただすこのやり方は、才知を誇る女性には共通の癖である。彼女たちは、自分の感情を明らかにしなければ、相手の感情をもっと洞察できるのだと考えていた。だからそれでは、感情を示す勇気を失わせるだということがわかっていない。問いただされる人間は、それだけで警戒しはじめ、本当に関心を寄せてくれるのではなくて、ただおしゃべりさせたいだけなのだと思います、彼は嘘を言うか⑤、口をつむぐか、ますます用心をして、相手の好奇心にだまされるよりは、愚か者にされるほうがまだましだということになる。要するに、自分の心を隠そうとするのは、他人の心を読むためには、いつも下手なやり方である。

ヴェルセリス夫人は、愛情や憐れみや親切を感じさせる言葉は、けっしてひとことも言わなかった⑥。冷やかに問いかけ、私もひかえめに答えた。私の返事が小心

だったので、彼女はそれを卑しいと思ったに違いなく、嫌気がさした。終わりの頃には、もう何も聞かず、用事の話しかしなかった。彼女はありのままの私よりも、彼女かつくった私を判断し、私を一個の下僕としてしか見なかったで、こちらもそれ以外のものに見せようがなかった。(p.81-84、下線は熊本による)

ルソーは上記の引用で語り手として次のような介入し、自分こそが遺産を継承するに足る人物であることを「いつも眼の前にいる、多少は望みのある青年に、愛情を持つのは当然であり、自分が死ぬと感じていれば、その後この青年が助けや支えを必要とするだろう、と考えるのは当然だった」(下線部②)と強調している。これは明らかに語り手ルソーの些か身勝手な主張であり、ヴェルセリス夫人から受けるべき「愛情」や「遺産」に対する願望=欲望を記している文である。一言で言えば、ルソーはヴェルセリス夫人の意志=遺志を直接的に代行したかった、ということである。直接的、というのは、ジャン=ジャックがヴェルセリス夫人の口述筆記をしていたという記述にもあるように、夫人の「声」を直接的に書き記すことでしか、彼女の意志=遺志の「真の」代行者となりえないからである。ここにルソーの「言語論」におけるパロール(音声言語)とエクリチュール(書記言語)の対立を見いだすのは穿ちすぎた見方であろうか。ルソーの『言語起源論』に述べられていることは、音声言語は思考や感情を直接的に(現前的に)表現しているので、書記言語に比較してより起源の真実に近い表象なのである³⁾。

しかし、ヴェルセリス夫人の意志によってか、或いは他の者によってか、ジャン=ジャックはこうした遺産の継承者として認められず、この後に、「夫人が遺言書を作ったときに、その一週間も前から、わたしは夫人の部屋にはいっていなかった」(p.83)とあるように、夫人の残す法的な「遺言」を直接的に口述筆記することができない。さらには、「家の使用人名簿に記されて」いなかったで、ジャン=ジャックは「なにももらえなかった」(je n'eus rien) (p.84)のである。ヴェルセリス夫人の意志=遺志の直接的代行者になるという欲望はかくして予め挫折することが予定されているのだ。要するに、ヴェルセリス夫人は「私にはなにもしてくれなかった」(elle ne fit rien pour moi)のである。

ヴェルセリス夫人がジャン=ジャックに「なにもしてくれなかった」(elle ne fit rien pour moi)という

ことは何を意味しているのだろうか。ヴェルセリス夫人は、その本来的な「冷たさ」(insensibilité)、「冷淡さ」(sécheresse)が特徴である。彼女は才知のある敬意を表すべき人物といわれながらも、その態度において感情(感性)(sensibilité)の欠如した女性として描写されている。彼女は、ある意味で「理性的」ではあるが、善行をなすにも機械的な態度をとるのである。ジャン=ジャックに対しては、「ヴェルセリス夫人は、愛情や憐れみや親切を感じさせる言葉は、けっしてひとことも言わなかった (Mme de Vercellice ne m'a jamais dit un mot qui sentit l'affection, la pitié, la bienveillance) (下線部⑥)」のである。こうしたヴェルセリス夫人の否定的側面が、「なにもしてくれなかった」(elle ne fit rien pour moi)という表現の「なにもない」(rien)という言葉によく表れている。これはある種の「欠如」、なにものかの「不在」を表現したものであることは明らかである。同様の否定の表現は、「そっけなく冷たく問いただして、私の返事には、いかなる同意も非難もあらわさないのは、いかようにも信頼のしようがなかった。私のおしゃべりが気に入ったのか、気に入らないのか、まったく見当がつかないとき… (下線部④)」(Des interrogations sèches et froides, sans aucun signe d'approbation ni de blâme sur mes réponses ne me donnaient aucune confiance. Quand rien ne m'apprenait si mon babil plaisait ou déplaisait...)という文にも見いだせる。かくして、この欠如は、ジャン=ジャックが遺産として「なにももらえなかった」(je n'eus rien) ことへと帰結してゆくことになる。

さて、下線部⑤については、ジャン=ジャックがこのすぐ後にリボンを盗んだ容疑でまさに「問いただされる人間」Un homme qu'on interrogeとなり、「嘘を言う」ことになる、ということを考慮にいと、ルソーの「弁明」はここで既に開始されていると考えられる。しかもその弁明は、自分の「嘘」がヴェルセリス夫人の感情の「欠如」にあるというのである。この文章での「問いただす」主体はonという非人称代名詞であり、後でより詳細に見るように、ジャン=ジャックの盗みを咎め裁きの場に召喚する主体のonと呼応している。「(それ(リボン)はたちまち見つかった) on me le trouva bientôt (p.84)、「どこでとったのかと人々は知りたがった」On voulut savoir où je l'avais pris、(ibid.)、「ふたりのうちどちらがごまかしたのかを、確かめる必要があると判断された」l'on jugea qu'il

importait de vérifier lequel était le fripon des deux. (p. 85)、等々)

こうした不定代名詞の使用によって強調されるのは、ヴェルセリス夫人も含めた不透明な主体の存在であり、後で述べる「利害を隠した意地の悪い芝居」の首謀者であるヴェルセリス夫人の取巻きとジャン＝ジャックとの関係である。ヴェルセリス夫人自身も「自分の意見を決して見せない」、「冷淡でそっけない」つまり、ジャン＝ジャックには見抜くことのできない外部的存在として、首謀者達のある種の「陰謀」に加担するものとしてある。

陰謀

かくして、ヴェルセリス夫人が冷淡であり、自分の遺産をジャン＝ジャックに残さなかった理由を、ルソーは彼女の取巻き達の仕組んだある種の陰謀であるとして描き出している。

私はこの時から、利害を隠したあの意地悪い芝居を経験したのだと思う。それは一生私に、逆らう気を起こさせ、そういう利害を生み出す表面の秩序 (l'ordre apparent) に対して、まったく自然の嫌悪感 (une aversion bien naturelle) を起こさせたのである①。ヴェルセリス夫人には子供がないので、相続人としては、熱心に夫人のご機嫌をうかがう、甥のラ・ロック伯爵しかいなかった。その他に、主な召し使いたちも、ご主人の命が長くないのを見て、打算を忘れず、夫人のまわりには多くの人がつめかけたので、彼女に私のことを考える暇かあるというのは難しい話だった。この家を取り仕切っていたのはロレンチ氏という抜目のない男だか、その妻はさらに抜目ない女で、夫人にうまくとりいついていたので、ここでは雇われた女というよりは、むしろ女友達とまったくあいだった。彼女はボンタル嬢という姪を、小間使いとしてこの家に入れていた。これが悪賢い女で、侍女のような様子を気取り、叔母を助けて夫人につきまとったので、夫人はものの見方もやり方も、この二人の言うなりであった (彼らの眼でしかものをみず、手によってして振る舞わないようになっていた)。 (elle ne voyait que par leurs yeux et n'agissait que par leurs mains.) ②私は運悪くこの三人の気に入らなかった。言うことは聞いたのだから、役には立ってやらなかった。われわれの共通の女主人に仕えるほか、さらに召使いの召使いになる必要かあるとは考えなかった。それに彼らにとって私は、不安な存在であった。私がしかるべき地位にいないことは、彼らにもわかっていて (Ils voyaient bien que je n'étais pas à ma

place) ので、夫人もそのように考えて、 (ils craignait que Madame ne le vit aussi) 私を地位につかせようすれば、彼らの分け前が減ることを心配していた。③この種の連中は、欲張りすぎて公正であることができず、他の人に残されたものはすべて、自分自身の財産からとっていったようにみなすのである。そこで彼らは集まって、私を主人の眼から遠ざけようとした。夫人は手紙を書くのが好きだった。それは彼女のような状態にいては、気晴らしであった。彼女は夫人がそれを嫌うようにさせ、疲れるということを医者に説得させて、止めさせた。私には勤めかわかっていないという口実をつけて、私の代わりに、大きなかごかきのような田舎者を二人、夫人のまわりに使った。要するに、非常にうまくやったので、夫人が遺言書をつくったときに、その一週間も前から、私は夫人の部屋には入っていなかった。④確かにその後では、まえのように部屋に入った。そしてだれよりも熱心でさえあった。というのは、この気の毒な夫人の苦痛に心を引き裂かれ、彼女が苦しんでいるときの粘り強さか、非常な尊敬と親愛の情を抱かせたからだ。そして彼女にもだれにも気づかれずに、その部屋で心からの涙を流したのである。(pp.82-83、下線は熊本による)

引用文の下線部①で言われる、夫人の取巻き達が成していた「表面的な秩序」とは、その後でルソーが示唆するように「地位」(place) による社会的秩序である。それに対するルソーの「自然の嫌悪」(une aversion bien naturelle) という表現は、彼が「自然に」ある側からの批判的な見方に他ならない。つまり、財産を独り占めするという「利害」を追及する三人の取巻き達は、その陰謀の下に「社会」を作り出し、それに対していわば「自然人」であるジャン＝ジャックが反抗しつつも犠牲になる、というメカニズムが垣間見える。ルソーは、『告白』第三巻の「トリノの晩餐」²⁾のエピソードにあるように、こうした「秩序」の下にある「事物を自然の秩序に置き直し、運命の侮辱によって辱められた才能のために報復する」³⁾ことを密かに欲望している。そしてこの欲望はこのエピソードにおいては実現することのない「地位」の逆転によってしか実現されないだろう。

しかし、この実現され得ない地位の逆転は、ルソーの欲望としてテキストに言語化されている。ジャン＝ジャックが「しかるべき地位に (à ma place) いないこと」(下線部③)を知っていた、という彼ら陰謀の首謀者達とは、いかなるやり方によってこの「事実」を確認することができるのだろうか。また、多かれ少

なかれ彼らの「隠された」意図をルソー-或いはジャン＝ジャックはどのようにして見抜くことができたのであろうか。「地位」の逆転がどのようにしても成し遂げられないこのエピソードにおいて、ジャン＝ジャックが「しかるべき地位にはいない」ということは、「事実」ではなく、むしろルソーの願望＝欲望以外のものではない。語り手ルソーは、このようにしてジャン＝ジャックの地位を巡る願望＝欲望が刻印された言説を介入させ、彼が「一生涯」経験することになる「陰謀」³⁴の存在を、ここにおいても語って（騙って）しまうわけである。

更に、ここで重要なことは、この「陰謀」のメカニズムの中で、「夫人もそう（ジャン＝ジャックがしかるべき地位にいないと）考えて」しまう、という論理的飛躍が「事実」であるかのように提示されていることである。夫人がこのように考えること、それ自体、ルソーの願望＝欲望なのであり、おそらくは「現実」には起こらなかった事象なのである。しかし、これはルソーの想念にある首謀者達の想念の中にあるはずのヴェルセリス夫人の想念、として語られながらも、テキストの構造に影響を為すことになる。というのも、実際には言われることがなく、ヴェルセリス夫人がジャン＝ジャックに向かって発すべきであったであろう「あなたはしかるべき地位にはいない」(*vous n'êtes pas à votre place*)という言葉、或いは「遺言」は、リボン事件のテキストにおいて、マリオンがジャン＝ジャックに向けた叫び「わたしはあなたの立場にたたくありません」(*je ne voudrais pas être à votre place*)という言葉と、まさしく共鳴するからである。ルソーの「地位」(*place*)に対する願望＝欲望は、マリオンのリボン事件を通じてマリオンがジャン＝ジャックに面と向かって話す引用符をつけた直接的な言語という形で出現することになるのだ。

さて、下線部②においてヴェルセリス夫人は自分の意志を持たない傀儡マリオネットよろしく、取巻き達の「眼でしか見ず、手によってしか振る舞わない」(*elle ne voyait que par leurs yeux et n'agissait que par leurs mains.*)存在となり果てている。このことは、前半部において、彼女の欠如について強調されていた描写と相俟って、ヴェルセリス夫人が機械的な傀儡マリオネットであることを浮き彫りにさせないだろうか。彼女は「陰謀」(*machination*)に操られる機械(*machine*)＝マリオネット(*marionette*)として、臨終の床においても理性的＝機

械的に振る舞うだろう。ジャック・デリダは、ヴェルセリス夫人の死の物語とその直後に語られている「マリオンのリボン」の挿話の出来事、或いはヴェルセリス夫人とマリオンとの密接な関連性に言及し、マリオン *Marion* という名は、一方で傀儡マリオネット (*marionette*) の *marion* (-ette) の発音と共鳴し、他方で聖母マリア (*Marie*) に共鳴すると述べている³⁵。確かに、ルソーが「好意」を抱き、盗んだりボンを与えようとしたマリオンという人物が、ヴェルセリス夫人が物語の場から退場した直後に登場しているのは偶然ではないだろう。マリオンはヴェルセリス夫人の「代理補完物」(*supplément*)³⁶として、ヴェルセリス夫人の意志＝遺志の「欠如」、そして夫人が残すべき遺産の「欠如」を埋め合わせるために登場しなければならなかったのではないだろうか。或いは、死者がジャン＝ジャックに言うべきであった最期の言葉を亡霊の如く甦らせジャン＝ジャックにその遺言を直接的に言わねばならなかったのではないだろうか。

ヴェルセリス夫人の死

ヴェルセリス夫人の臨終場面を語るテキストは、リボン事件に先立つヴェルセリス夫人家の物語を締めくくるとしてある。ヴェルセリス夫人が最後の言葉を吐いて息を引き取り、彼女の遺産が分配され、ジャン＝ジャックには「新しい服」のみが与えられる。そして、また別の新しい「仕事の口」(*place*)がジャン＝ジャックに与えられようとする。これが、このテキストの表面的な概略であり、ヴェルセリス夫人家での物語は、彼女の死によって、一見、文字通り終息を迎えたかに見える。しかし、この直後、語り手は「ヴェルセリス夫人の家にいたあいだのことで、言うべきことをこれで全部言ったのなら、いいのだが」(p.84)という言葉で、リボン事件の告白を開始するのである。

この最後の引用で、われわれが見てゆきたいのは、ヴェルセリス夫人の最期のテキストに現れる言語とそれに続く物語との関連性である。このことを示すのは、第一に「死」を表す言語系の連なりであり、第二に、罪のメタファーである「重荷」(*poids*)という言葉である。

われわれはとうとう彼女を失った (*Nous la perdîmes enfin*)。①わたしは彼女が息を引き取るのを見た。彼女の

生涯は、才智と分別のある女性のそれであり、その死は賢者のそれであった。彼女が宗教の義務を、怠りもせず果たしたその魂の静けさによって、カトリック教かわたしには好ましく思われたといえる。生まれつき、きまじめな人であった。その病気の最後のころ、彼女は一種の陽気な態度を取ったか、それはお芝居にしてはあまりにも規則正しいもので (*trop égale pour être jouée*)¹⁷、自分の境遇の悲さに対し、理性で平衡 (*contrepois*) をとったに過ぎなかった。彼女は最後の二日だけ床につききりて、絶えず静かにみんなと話していた。とうとうものが言えなくなり、すでに臨終の苦しみにあったとき、夫人は大きなおならをした。「よろしい」と寝返りをしながら彼女は言った。「おならをするような女なら、死んでいない。」これか口から出た最後の言葉だった。

夫人は地位の低い召使いたちに、一年分の給料を残した。しかし、家の使用人の名簿に記されていないわたしは、なにももらえなかった (*mais n'étant point couché sur l'état de la maison, je n'eus rien*)。けれども、ラ・ロック伯爵は、三十リーウルを与えるようにしてくれ、わたししか着ていた新しい服で、ロレンチ氏がとりあげようとしていたのを、わたしに残してくれた。伯爵はわたしの仕事の口を探してくれる (*chercher à me placer*) と約束し、会いに来て良いといった。二、三度行ってみたが、話すことかできなかつた。引っ込み思案の私は、もう行かなかつた。それが間違いだったことは、やかて分かるだろう。

ヴェルセリス夫人の家にいたあいだのことで、言うべきことはこれで全部言ったのなら、いいのだが！しかし、表面的な状態は同じであったとしても、私がこの家を出たときは、入ったときとおなじではなかつた。長く消えない罪の思い出と、悔恨のたえがたい重荷 (*l'insupportable poids des remords*)^② を持って出たのだ。そしてそのため、四十年もたったのちも、私の良心はなおもその重荷を背負い (*ma conscience est encore chargée*)、^③ その苦い感情は弱まるどころか、年をとるにつれて激しくなる。少年の時の過ちが、これほどむごい結果をおよぼすとは、だれか信じるだろうか。私の心か慰められないのは、間違いのないその結果のためなのだ。愛すべき、正直で、立派で、たしかに私よりはずっと値打ちがある一人の娘を、おそらくは恥辱と悲惨のなかに、おとしめたのである。 (*J'ai peut-être fait périr dans l'opprobre et dans la misère une fille aimable, honnête, estimable, et qui sûrement valait beaucoup mieux que moi.*)^④ (pp.83-84、下線は熊本による)

われわれは、上記の引用の冒頭 (下線部①) で、ヴェルセリス夫人の死を宣告する、「われわれはとうとう

彼女を失った」 (*Nous la perdîmes enfin*)、という表現を見いだすのだが、この「失う」 (*perdre*) という動詞は、小論の冒頭で紹介したリボンの盗みの出来事を語る中で、「ポンタル嬢だけが、バラ色と金色の、もう古くなった小さなリボンを紛失した」 (*La seule Mlle Pontal perdit un petit ruban couleur de rose et argent déjà vieux*) (p.84) という文脈で再び用いられることになるだろう。ヴェルセリス夫人とリボンの喪失が同じ動詞「失う」 (*perdre*) によって記されるのは偶然であろうか。しかも、このリボンは「もう既に古くなっていた」 (*déjà vieux*) と記され、死に臨むヴェルセリス夫人を容易に想起させる。

ヴェルセリス夫人の喪失は、このように反復されて彼女以外のものによって代替されているのである。ジャン＝ジャックが盗みと偽証によって「おとしめる」=「亡き者にする」 (*périr*) (下線部④) マリオンの場合も、ヴェルセリス夫人の喪失がもたらした反復的な現れではないのだろうか。ヴェルセリス夫人の「死」は、リボンの喪失によって繰り返され、まさにこのリボンが原因で、ジャン＝ジャックはマリオンを「破滅させる」 (*perdre*) ことになるだろう。「ラ・ロック氏が私を引き離して、『あのかわいそうな娘を破滅させてはいけない (*ne perdez pas cette pauvre fille*)。もしも、君に罪があるのなら、私に白状しなさい』と言ってくれたならば、私はすぐに彼の足下にひれ伏しただろう。」 (p.87) とあるように。

かくして、ヴェルセリス夫人の死は、それで終息するどころか、その後の一連の「喪失」が開始され、反復される契機となっているのである。これはいわゆる喪の作業なのだろうか。というのも、喪の作業は、身内の死を契機として死んでしまった他者を自己の内部に引き受け同化する心的過程であり、場合によってはその他者を、生ける死者として自己の内部に住ませるからである³⁸。ヴェルセリス夫人は、生ける死者として、ジャン＝ジャックにリボンを盗ませ、マリオンを破滅に導き、このような一連の「喪失」をもたらしたのだろうか。しかし、喪の症例は、愛する人物へのリビドーがその人物の死を境に行き場を失って陥る心的現象である。少なくとも、表面的にはヴェルセリス夫人がジャン＝ジャックの愛情の対象であったという記述はどこにもない。夫人はジャン＝ジャックに対して冷淡で機械的であった。ヴェルセリス夫人の死につ

いて喪があったとは些か考えにくい状況である。ただし、こうした喪がありうるとすれば、その対象はむしろマリオンであると考えられる。ルソーの告白にある、リボンを盗んだのは「彼女への好意が原因であった」という一文を思い起こしてみよう。

さて、マリオンに対する「悔恨のたえがたい重荷」(下線部②)とは、彼女を破滅させ、喪失したことへの喪の重荷と読み替えることができないだろうか。「たえがたい」と同時に「消しがたい」この重荷は、前述したように死に至る病が「癒しがたい」ことに通底していると考えられる。ヴェルセリス夫人の「欠如」を埋め合わせるために登場するマリオンは、いわば夫人と一体化した存在としてルソーの内に同化されえないクリプト³⁹を形成している。そこで通常の喪のように、この死者達は同化され、取り込まれず、ある種の重荷として「四十年経ったのちも、私の良心はなおもその重荷を背負って」(下線部③)いるのであり、文字通り、生ける死者として「眠れない夜、あの哀れな娘がやってきて、私の罪をあたかも昨日犯したことであるかのように非難するのが目に浮かぶ」(voir dans mes insomnies cette pauvre fille venir me reprocher mon crime, comme s'il n'était commis que d'hier) (p.86) のである。ルソーのクリプトに住まうヴェルセリス夫人／マリオン、この「重荷」こそが、ルソーに「自分の告白を書こうと決心」(la résolution que j'ai prise d'écrire mes confessions) (p.86) させたものである限り、罪の意識は消しがたいものであり続け、その弁明もまた繰り返されるのではなかろうか。

結語

『告白』第二巻の「マリオンのリボン」の挿話をテキスト分析するにあたり、われわれは主にヴェルセリス夫人の死を巡るテキスト全体から抽出できる言語を手掛かりとして、リボン事件の告白を語る言語との相関性を辿ってきた。われわれの主要な論拠は、自らについて語る自伝という語りの形式が必然的に持つ問題点、すなわち、語る主体の過剰な欲望が自己についての「事実」を生成するのではないかという点にあった。ヴェルセリス夫人の家での出来事のテキストと、後に続くリボン事件を語るテキストとの間で見いだされる二つの系統的な語の使用法、すなわち、「地位」と「喪失」とに関する表現系は、前者がこの言語を通じた語り手ルソーの欲望の現れを、後者がクリプト的な

喪の形象である可能性を指摘してきた。

欲望であれ喪であれ、この系統的な語群はいずれも、ヴェルセリス夫人とマリオンとを、リボンで、文字通り、結びつける機能をもっているのである。リボンは、ド・マンの指摘にもあるように、ジャン＝ジャックのマリオンへの欲望を媒介するものであると同時に、われわれがみたように「喪失」の意味も媒介しているのである。欲望の備給の対象であり喪失してしまうこのリボンに注目するとき、フロイトの『快感原則の彼岸』⁴⁰において述べられる消失と再現 (fort/da) の遊技の対象「木製の糸巻き」を思い起こすのは、あまりにも思弁的であるだろうか。いずれにせよ、われわれはこの「マリオンのリボン」のエピソードを自己の過去についての回想として文字通りに読むことも、ド・マン流にテキストの言語から無意識の意味を根こそぎ排除して解釈するつもりもない。蓋し、われわれが見てきたように、このエピソードのテキストは十分に精神的分析的解釈をゆるすものであり、同時にド・マンの提出している「機械」のテーマについても更に検討する必要がある。

冒頭に示したルジュンヌの響みにならい、対象のテキストを最大限全文引用しようとしてきたが、紙幅の都合もあり、肝心の「リボン事件」のテキスト分析については先送りせざるを得なくなった。われわれは、この完結しない小論について、ルソーとともにこう言おう。「もう二度とこの話はしなくてもいいようにしたいものである」と。しかし、もう話しのできなくなったヴェルセリス夫人が再び口を開いたように、ルソーがこの哀れなマリオンについて再び言及したように、最期の言葉はまた繰り返されるだろう。

後注

- 1 Jean-Jacques Rousseau, *Les Confessions*, in *Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau* tome I, Gallimard, 1959.なお、本文中の引用に関する書名のない頁数はこの版のものとする。また、訳出にあたっては、以下のものを参照し、必要と思われる箇所については独自の訳をつけ、原文の引用文は現代表記に改めた。『告白』ルソー全集 第1巻 第2巻 小林善彦訳 白水社。
- 2 Cf. Jean-Jacques Rousseau, *Emile*, in *Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau* tome IV, Gallimard, 1969.
- 3 Cf. *Ibid.*, p.489.
- 4 *Ibid.*, p.490.ここで言う「危険」とは、ルソー言うところ

- ろの「情念」の誕生、すなわち、広い意味での性的覚醒による精神的動揺を意味している。
- 5 Rousseau, *Les Confessions*, pp.80-87.
- 6 Rousseau, *ibid.*, p.86.
- 7 Jean Starobinski, *La transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1971, p.206
- 8 Rousseau, *Les Confessions*, pp.16-17
- 9 Cf. Raimond Trousson et Frederic Eigeldinger, *Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau*, article "Lambercier", Honoré Champion, 1996, p.482
- 10 ここでの引用はいずれもスタロハンスキーの『透明と障害』*La transparence et l'obstacle*, p.206から。スタロハンスキーは、ここで、次のようなルソーの自己弁明のための言説に差し挟まれる「奇妙な」(bizarre)という言葉から、彼の無意識の領域を垣間見ようとしている。すなわち、「あの不幸な娘に罪を着せたのは、奇妙なことだが彼女に対する好意が原因であったことは本当である。」(p.86)。確かに、「奇妙な」という言葉はルソーが自分自身の無意識的行動を理解できない時に『告白』のテキストに現われるのだろう。ランベルシエ嬢の折檻に対して、「そしてなにより奇妙なのは、この罰のため、それを加えた人に対して愛情を持ったことである」(p.15)と述べているように、ルソーの、自己の心理を前にして逡巡している様子がこの言葉には兆候的に読み取れるように見える。しかし、これらの言葉は、あくまでもルソーがジャン＝ジャックの心理と行動に対して判断し、更には一定の解釈を施した「奇妙さ」を述べたものであることを考慮しなければならない。われわれはルソーの記憶の中にあるジャン＝ジャックの心理なるものの正確さについて十分疑うことができるからである。したがって、これらの「奇妙さ」は、語り手であり一人の分析家でもあるルソーの解釈を既に経由したものであるといわねはならない。問題はむしろ、語り手としてこの言葉を述べることもつ言語的、テキスト的効果である。Cf. Jean Starobinski, *ibid.*
- 11 Jean Starobinski, *ibid.*
- 12 Philippe Lejeune, *Le pacte autobiographique*, Coll "Essai", Edition du Seuil, 1996 (1975), p.54.
- 13 Philippe Lejeune, *ibid.*, p.52.
- 14 Paul de Man, *Allégories de la lecture (Allegories of Reading)*, traduit par Thomas Trezise, Edition Galilée, 1989.
- 15 言語行為論とは、端的に言って、分析哲学などで問題となるような言語の真／偽だけを問う言語観に対して、発話することによってなんらかの行為を遂行する言語に関して論じる言語哲学である。J.L.オースティン、『言語と行為』大修館書店1978年などを参照されたい。
- 16 Jean-Jacques Rousseau, *Les rêveries du promeneur solitaire*, in *Œuvres Complètes* tome I, p.1029.
- 17 Cf Jacques Lacan, 《Le séminaire sur "La lettre volée",》 in *Écrits I*, pp.19-75, Coll Points, Edition du Seuil, 1966.
- 18 Paul de Man, *op.cit.*, p.345.
- 19 Paul de Man, *ibid.*, p.346
- 20 Paul de Man, *ibid.*, pp.355-356.ド・マンの言う二重のシステム（「代替のシステム」と「機械のシステム」）の論法は、極めて難解で捉えにくい論理になっている。デリタは特にこの「機械のシステム」について、トゥルースが『アンチ・オエディプス』(Gilles Deleuze, *L'Anti-Edipe*, Edition de Minuit, 1972)の中で展開している「欲望機械」(machine désirante)からの援用であることを示唆している(Cf. Jacques Derrida, 《Le ruban de machine à écrire》, in *Papier Machine*, Galilée, 2001, p.76)。二重のシステムについては次の論文を参照されたい。宮崎裕助「弁解、機械、ランダムネス」『現代思想』1999年 3月号 pp.116-129
- 21 Paul de Man, *ibid.*, p.356.
- 22 シャック・デリタはジョン・サールとの論争において既に「言語行為論」を批判しているが、ド・マンの分析についても「タイプライター・リボン」という論文の中で事実確認的言明と遂行的言明の分離について疑問を述べその決定不可能性を次のように指摘している。「全ての事実確認性は少なくとも潜在的な遂行性に根拠をおいている」。Cf. Jacques Derrida, *op.cit.*, pp.77-83.
- 23 Paul de Man, *op.cit.*, p.337.この二分法について、デリタは、告白のテキストが「事実」や「真実」を示す際にも、「全ての告白的テキストは、既に、自己弁明的である」と述べて、ド・マン的、言語行為論的二分法の論拠を排除してみせている。Cf. Jacques Derrida, *op.cit.*, p.81.
- 24 Jacques Derrida, *ibid.*
- 25 Jacques Derrida, *ibid.*, p.87.デリタが批判しているのは、ド・マンの次のような注である。「乳癌で死んでしまうウェルセリス夫人によってルソーが拒絶されるという厄介な物語は、マリオンのお話にじかに先立っているが、このテキストのいかなるものも、拒絶の場面に出ているウェルセリス夫人とマリオンとの代替を可能にするような結びつきを示唆していない。」(Paul de Man, *op.cit.*, p.341, n.2) デリタの批判は、ド・マンの「いかなるものも」結びつきを示唆しない、という点にあり、この二つの物語が「隣接」していることの「適当さ」(l'à-propos: この表現は日本語の「適当さ」という語に近似している。つまり、「時宜を得た適切さ」という本来の意味と、「ところで」という意味にも用いられ話題転換をはかる表現でもある)には解釈するべきものか確かにありうるとしている。
- 26 以上の説明においても、われわれはルソーという姓とジャン＝ジャックという名を意図的に区別して使ってきた。その理由は、自伝という一人称の語りの形態もつ特徴を際立たせ、語りの現在に位置する「わたし」か過去の「わたし」について語る時、アプリアリにこの両者を混同しないためである。周知のように、先にも挙げたフィリップ・ルジュンヌの「自伝契約」論は、自伝というジャンル定義を述べる際、テキストに現れる「わたし」の在り方を三つに分離し、語る主体としての「わたし」、語られる主体としての「わたし」、

- そして作者という位格を明確に価値づけている。作品が自伝であるためには、この三者が一致している必要がある、というようにルジュンヌは自伝のジャンルを定義している。従って、語る主体であるルソーが、語られる主体であるジャン＝ジャックについて物語る、というのがこの『告白』という自伝作品の基本的なナラトロジーの構造である。Cf. Philippe Lejeune, *op.cit.*, pp.13-46.
- 27 『告白』において「奇妙な」*bizarre*という表現が用いられるのは、スタロバンスキーが指摘している箇所以外では主に他者に対して用いられている。例えば、ヴェラヌス夫人の考えや言動に対して (pp.194-195及びp.229)、この書の末尾においてはドルバックを始めとするルソーの「迫害者」達の「奇妙な行動」について (p.434aの異文の箇所及びp.646) この表現が現れる。例外的に、ルソーが『学問芸術論』を公表した直後、人々がこの「奇妙な男」を知りたがった (p.367)、という自己についての一文があるが、これはむしろ、ルソーの*bizarre*という表現が自己と他者との間の断絶を前提にしていることをより明瞭に証している。
- 28 Paul de Man, *op.cit.*, p.343.
- 29 ショジャーナ・フェルマン (立川健二訳)『語る身体のスキャンダル』勁草書房1991年p.97。
- 30 スタロバンスキーは*Relation critique*という著作の「批評の意味」の章において『告白』第三巻にある「トリノの昼食」を丹念に分析し、*place*という語のもつ象徴性について論じている。ジャン＝ジャックはトリノのグヴォン伯爵家にやはり下働きとして雇われているが、ここでは、彼に対して家の中のだれ一人としてわからなかった「紋章の銘」の意味を解釈するという、自己の才能の真価を発揮できる機会が与えられる。ジャン＝ジャックは見事にこれを解釈してみせ、一同が驚嘆して彼を見つめ称賛する。こうした挿話の中でルソーが自己を語る際に用いる*place*という語に注目すると、ジャン＝ジャックがこの家銘を解釈して見せた「勝利」の出来事の前において、ジャン＝ジャックの*place*語の意味が「社会的地位」から「本来的にふさわしい場所」という意味に転じている。すなわち、ジャン＝ジャックに割り当てられていた下僕の地位をあらわす*place*という語が、「勝利」の後に、「革命的」に逆転してしまうのである。Cf. Jean Starobinski, 《Le sens de la critique》, in *Relation critique*, Gallimard, 1972, p.107.
- 31 Cf. Rousseau, *Essai sur l'origine des langues*, in *Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau* tome V, 特にChapitre V, De l'écritureを参照されたい。
- 32 Rousseau, *Les Confessions*, pp.94-96.
- 33 Rousseau, *Les Confessions*, p.96. 注20を参照されたい。
- 34 ルソーはその晩年に自己を貶めようとする陰謀同盟がティドロ等のフィロゾーフ達によって結ばれている、という事実あるいは妄想を『告白』や『ルソーがジャン＝ジャックを裁く、対話』に記している。こうした陰謀に言及される際に用いられる特徴的な表現は、例えば、『告白』の第十二巻では「闇の仕業」(*l'œuvre de ténébres*) (p.589) 或いは『対話』においては「見通すことのできない秘密」(*mystère impénétrable*) (p.661) といったものであり、「陰謀」が不透明で見抜くことのできない実態であることを示唆している。
- 35 Jacques Derrida, *op.cit.*, p.144.
- 36 「代理補完物」(代補) (*supplément*) とは、デリダがルソーの『言語起源論』等の分析で発見した形而上学的に思考不可能とされる論理である。『言語起源論』においてルソーは、まず初めに言語の本体として充実した音声言語があり、そこに現前性(直接性)の欠けた書記言語が外から訪れ、本体なしにますます二次的な補足物 (*supplément*) として付加されることになる、と述べ、書記言語を思考からの墮落として考える。しかし、書記言語に特有な性質とされる反復性は既に音声言語の内部でそもそもすでに働いているのであり、音声言語の現前性は完全なものではなかったといえる。書記言語は音声言語が始まる場所から既に始まっているのである。しかし、ルソーそして形而上学全般はそこに、内部/外部、自己/他者、起源/反復、というような階層的な二項対立を設定しようとする。「代補」はこのように、外部が内部を代理した同時に補完しているという形而上学的立場から防ぐことのできない運動であり、このことはルソーの諸作品に記された*supplément*という語の両義的な意味として見いだせるとデリダは指摘している。Cf. Jacques Derrida, *De la grammatologie*, Edition de Minuit, 1967.
- 37 この部分のフランス語 (*trop égale pour être jouée*) は、小林善彦訳のルソー全集版の『告白』においてなぜか翻訳されていない部分である。また、桑原武夫訳の岩波文庫版『告白』でも、*égale*を均等という意味に取り、「少しもむらのない明朗さをもって来た」と訳しているが、不十分であり誤訳の可能性がある。ここでは、次に「悲しみ」に対して理性で平衡をとった、と言っていることから考えて、*égale*は「平衡」的な意味を指していると考え、本文のような訳をつけた。
- 38 「喪の作業」については、フロイトが『悲哀とメランコリー』(1915年)において明らかにしている概念である。「愛着の対象を喪失した結果おこる精神内部の過程」(ラランシュ・ボンタリス編『精神分析用語辞典』「喪の作業」の項目、p.444を参照)であり、人が愛する対象を失った後、死という現実の受け入れを拒否しようとするが、長い葛藤を経て最後は現実が打ち勝つ、こうした一連の心的「作業」を言う。
- 39 フロイトの喪は、いわば「正常な喪の作業」であるか、我々のテキストにおいて、「喪の作業」が果たして正常に終わっている、とはいささか考えにくい。というのも、我々が「喪」の心理として読み替えようとしている、マリオンに対する罪への「悔恨」の情は、「自分の告白を書こうと決心するのに大いに役立った」(p.86)とあるが、この「告白」を通じて決して癒されることなく、また新たに、『夢想』の内に告白されてしま

うのである。そもそも、この出来事とそれに伴う心理は「どんなに打ち解けた間柄でも、ヴァランス夫人にさえも、そうする（打ち明ける）気にはなれなかった」（p 86）とあるように、「告白されえない」性質のものである。しかも、この「喪」はそれとして認識されてさえもない。つまり、ある種の病的な異常な「喪」である。このような「異常な喪」について、フロイトの理論を発展させたニコラ・アブラハムとマリア・トロックは、喪を拒んだものか、自分の内部に死者を内包する場所としてある「クリプト（地下聖堂）」の概念を論じている。「言葉に出せない喪は主体の内に秘密の地下墓所を設置する。このクリプトの内に、言葉やイメージや情動から再構成された喪失の対象相関物（＝死者）が、生きている人として住まっている」。（Nicolas Abraham, Maria Trok, 《Deuil ou mélancolie》, in *L'Ecorce et le noyau*, p 266）。

- 40 ジグムント・フロイト（井村恒郎、小此木啓吾訳）『快感原則の彼岸』フロイト著作集 第6巻所収を参照されたい。